

I P M実践指標モデル (大豆)

管理項目	管理ポイント		チェック欄
	取組内容	メモ	
圃場管理	1) 田畑輪換によって病害虫及び雑草の発生を抑制する。	土壌病害、害虫、雑草、連作障害の発生を抑制する。黒根腐病の抑制には3年間の水田期間を要する。	
圃場衛生	2) 圃場ごとに農業機械に付着した土壌を除去し、土壌病害および雑草種子の拡散を防止する。	同一の作業機により複数の圃場で作業する場合。	
	3) 土壌伝染性病害や雑草種子の拡散を防止するため、発生状況に応じて作業順を考慮する。		
雑草対策	4) 雑草種子の持ち込みを軽減させるため、完熟堆肥を使用する。		
	5) 畦畔除草により畦畔からの雑草の侵入を抑制する。		
排水対策	6) 明渠・暗渠を設け圃場内の排水性を高める。	初期生育の確保および茎疫病、黒根腐病などの土壌病害対策。	
	7) 成畦播種により根圏の排水性を高める。	初期生育の確保および茎疫病、黒根腐病などの土壌病害対策。	
健全種子の使用	8) 健全種子を用いてウイルス病・種子伝染性病害を抑制する。	種子伝染性病害はウイルス病（褐斑粒）、紫斑病、斑点細菌病など。	
種子消毒	9) 塗沫処理または種子粉衣による種子消毒を行う。		
適正な品種の選定	10) 立地条件に応じて、病害虫抵抗性を考慮した県奨励品種を選定する。	紫斑病抵抗性（フクユタカ・すずおとめ：中、サチユタカA1号：強）、褐斑病抵抗性（フクユタカ・すずおとめ：強、サチユタカA1号：中）	
適正な播種作業	11) 適期播種を行い、病害虫の発生を抑制する。	フクユタカの播種適期は7月上中旬。過繁茂による病害虫発生の助長を抑制する。	
	12) 適正な栽植密度で管理する。	フクユタカでは条間70～75cm、株間18～20cmを標準として播種量を調整する。雑草の発生を抑制する時は多条播種とする。	
罹病残渣の除去	13) 収穫後、罹病残渣を集めて圃場外へ除去する。または地中深く鋤き込みを行う。	深耕により紫斑病・白絹病の菌核を死滅させる。	
防除の要否の判断・病害虫発生予察情報の確認	14) 圃場および周辺圃場を観察し、病害虫の発生履歴、現況を把握する。	ハスモンヨトウによる白変葉の発生状況を観察する。またフェロモントラップを圃場に設置し、発生予察を行う。	
	15) 病害虫防除所が発表する発生予察情報等を参考に、圃場における病害虫の発生状況を確認する。	病害虫防除所のホームページアドレス http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo	
	16) 指導機関（農業改良普及センター、農業協同組合、市町等）が発行する栽培情報を参考に、生育状況、栽培管理、病害虫の発生状況を確認する。		
	17) 気象台の発表する長期予報（週間天気予報、1か月予報など）を参考に、圃場における生育状況および病害虫の発生状況を確認する。	津地方気象台のホームページアドレス http://www.jma-net.go.jp/tsu/	
圃場管理	18) 防除作業を集団化することで、農薬散布の効率および効果を上げる。		
除草管理計画の策定	19) 播種後土壌処理剤を基本に、栽培方法、雑草の発生状況、天候に応じて効果的な除草体系を選択する。	残草状況に応じて播種前の耕起および非選択性除草剤処理、生育期の茎葉処理剤、中耕培土、手取りを組み合わせる。	
	20) 中耕培土を行い、株間および畦間の雑草を抑制する。	播種後土壌処理剤との体系で行う。ただし除草剤の効果のある期間内の実施は、その後の雑草の発生を助長するため注意が必要。	
	21) 残草がある場合は手取りや茎葉処理剤による除草を行う。	翌年以降の発生を防ぐため、種子を形成する前に行う。既に種子を形成している場合は圃場外へ搬出する。	
	22) 圃場ごとの前年の雑草の発生状況に応じて、適切な除草剤を選定する。		
紫斑病対策	23) 圃場ごとに開花状況を確認し、防除適期である開花始め～開花盛期に防除する。		

I P M実践指標モデル（大豆）

管理項目	管理ポイント		チェック欄
	取組内容	メモ	
ハスモンヨトウ対策	24) 白変葉を目印にして若齢幼虫期に捕殺する。	発生量が多い場合は若齢幼虫期に薬剤散布を行う。	
	25) 微生物農薬など天敵への影響が少ない農薬を使用する。また、フェロモン剤による誘引捕殺や交信攪乱を実施する。	農薬の天敵への影響については、日本バイオリジカルコントロール協議会のホームページ (http://www.biocontrol.jp/) 等を参考にする。 微生物農薬にはB T水和剤、核多角体ウイルス水和剤がある。	
吸実性カメムシ類対策	26) 成虫の飛来及び幼虫の発生を確認したら、結莢期～子実肥大期に防除を実施する。	ミナミアオカメムシは一部の合成ピレスロイド系殺虫剤に対して感受性が低いので、本種の優占する地域ではネオニコチノイド系殺虫剤などを選択する。	
農薬の使用全般	27) 対象病害虫・雑草に応じた薬剤の選定を行う。		
	28) 発生状況に応じて十分な効果が得られる範囲で必要最小限の使用量となる散布方法で実施する。		
	29) 当該病害虫・雑草に複数の登録農薬がある場合には、飛散しにくい剤型を選択する。	粉剤や液剤に比べて粒剤は飛散しにくい剤型である。	
	30) 農薬散布を実施する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上で使用する。	液剤：少量散布またはドリフト抑制ノズルを使用する。粉剤：D L粉剤を使用する。無人ヘリ：地上1.5mにおける風速が3m/秒を超えるときは散布しない。	
	31) 農薬を使用する場合には、特定の成分のみを繰り返し使用しない。さらに、当該地域で強い薬剤抵抗性の発達が確認されている農薬は使用しない。	紫斑病では、チオファネートメチルの耐性菌が確認されている。ハスモンヨトウでは一部の合成ピレスロイド系、カーバメート系殺虫剤に対して感受性が低い。	
作業日誌	32) 各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のI P Mに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。		
I P M研修会等への参加	33) 県や農業協同組合等が開催するI P M研修会等に参加する。		